

②



①

# 新旧比較

## 「携帯電話」から「ケータイ」へ 日常生活の変化

教科書p.38~39、44~45

生徒にとってもっとも身近な通信機器といえる携帯電話。急速に普及した現状とそのターニングポイント、あらたな問題についてNTTドコモのモバイル社会研究所・荒木さんに伺いました。気軽に使える反面、そのリスクにも気を配る必要があるのです。

❶ 携帯電話が普及するようになった背景と、それによって変化した生活についてお聞かせください。

もともと携帯電話は、固定電話で提供していたサービスを、場所を選ばずに外出先でも通話ができるようになったら便利ではないかということで、ショルダーホン(写真①)や自動車電話など、固定の回線に縛られずに移動中や外出先でも使えるというところから始まっています。最初の頃は、ごく一部のビジネスマンなど企業層の人が使うにとどまっていたのですが、技術的な進歩でだんだん端末が小型軽量化していったり低料金化したりしていく中で、使える層も広がってきました。

携帯電話のサービスを考えるうえで、iモードが使えるようになったことが、ひとつの大きなターニングポイントになったのではないかなと思います。もともと通話を中心だったところが、iモードを使うことで、データのやりとりができるようになったり、Webのようなインターネットのサービスが携帯電話で使えるようになったりしたわけです。通話に限らずWebサイトを閲覧したり、メールのやりとりをしたりするようになって、携帯電話の用途、機能が拡大したことが、非常に大きな意味を持ち、この流れが携帯の利用を大幅に広げたというところがあると考えています。

サービスとしても、FOMAのような第三世代携帯の登場や、高速、大容量化ができることに伴って、サービス機能もますます広がりをもってきています。

利用用途として、ベースとなる通話機能はもとより、メールの送受信やWebの検索閲覧、カメラ機能、動画の撮影、ゲーム、最近ではワンセグでテレビを観ることもできるようになりました。また、おサイフケータイにより、携帯端末を使った実際の商品の購入など、本来の携帯電話の機能とは全く離れた場面で、携帯電話が利用できるようになっています。携帯電話のもともとの利用ベースになっていた通話機能から、いろいろな形で機能が拡充して、それにとまって生活のあらゆる場面で携帯電話が使われるようになっていったというところがあると思います。

〈訪問先〉株式会社 NTTドコモ  
モバイル社会研究所 副所長 荒木 浩一 さん



携帯電話のリテラシー教育の重要性について、力をこめて語る荒木さん。

携帯電話の呼称がそれを象徴的な形で言い表していると思います。もともとは「携帯電話」という呼称で言われていたのが、最近では片仮名で「ケータイ」というような言われ方がされます。これは、携帯電話が「電話」という通話端末にとどまらず、いろいろな機能を持って、いろいろな用途で使われるようになったことを意味しています。携帯電話が、電話を越えて、我々の生活インフラとして、人々の日常生活に欠かすことのできないものになっていったわけです。

また、携帯電話の特徴として、「ウェアラブル」という言い方もされますが、固定電話と違って持ち運びができ24時間いつでも常に身につけていられることが挙げられます。若者からすれば、常に身につけ、様々な情報が入っているケータイは、自分の分身のような大切なものともなっているようですし、常に連絡をとりたいときに連絡をしたりとか、情報を見たいときに見ることができたりとか、人々の生活の利便性の中でも、「いつでも、どこでも、だれでも」という部分をもっともカバーできるのが携帯電話ではないかと思っています。

❷ 携帯電話の普及によって生まれる格差とこれからの問題点についてお聞かせください。

携帯電話を持っていることやどこでもメールできることが当たり前になるのは逆に、携帯電話を持たない、または操作できないことで問題になってしまう場合が出てきています。そういった新しい格差が生まれてきてしまった面があるのも事実です。

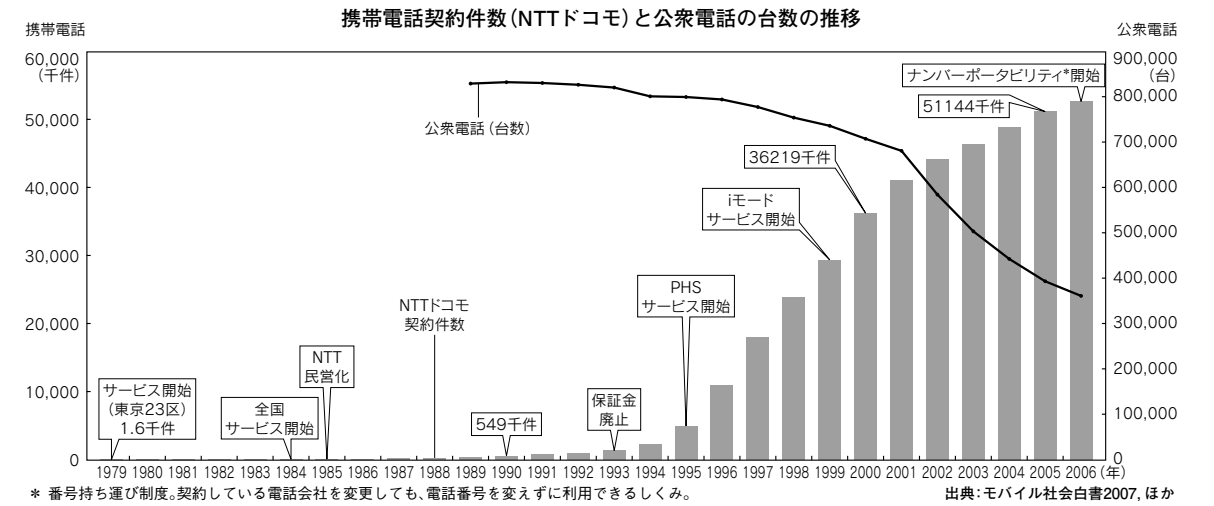
若年層につきまちは、いつから携帯を持たせるかという問題もあります。また、高齢層の方に関しては、以前「デジタルデバイド」というような言葉も使われましたが、機能や操作がわかりにくくて使いづ

らかったりする面もあるかと思います。これは携帯に限らず、とくにパソコンについても同様です。

携帯電話に関しては、こうした格差をなくすべく、高齢層の方にも携帯の便利な部分はぜひサービスを提供したいと思い、なるべくシンプルで使い勝手や操作性のいい端末を開発いたしました。それに伴って、たとえば携帯電話教室を開催するなど、側面からサポートも行うことで、使い方がわからないとか、使いにくいとか、そういう部分から生じる格差を解消すべく努めているところです。

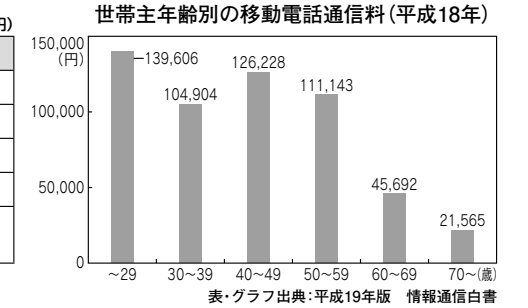
いまの情報社会の有り様を見ますと、これまでの時代と違って情報の受け手と送り手側の距離が縮まったというところがひとつ大きな特徴になっているのでは

ないかと思っています。自分が情報の送り手として、世の中に情報を発信することも容易になってきましたが、情報の受け手という面からみても、携帯電話からも、いろいろな情報に簡単にアクセスできるようになりました。ただ、情報の中には、有益情報もあれば、有害情報もあり、情報に対するリテラシー教育を、しっかりやらなければいけないのではないかと、これは私どもの事業者も含めて、かなり強く意識しているところです。物理的には、フィルタリング・サービスというものがあり、有害情報などにアクセスできなくすることもできるわけですが、物理的な対応だけでなく、リテラシー教育もしっかり行うこと、この両方が大事なことだと考えております。



電話通信料の推移と世帯支出に占める割合 (単位:円)

(年)	平成 12	15	18
電話通信料	98,373	118,783	124,332
(うち) 固定電話通信料	69,791	51,034	41,720
(うち) 移動電話通信料	28,582	67,749	82,612
世帯消費支出	3,805,600	3,631,473	3,543,990
世帯消費に占める電話通信料の割合 (%)	2.58	3.27	3.51



表写真解説

①ターニングポイントとなった携帯電話と最新機種  
左: ショルダーホン(1985年)。長さ22cm×高さ19cm、重さ3kgという大きさで、連続通話時間も、約40分という短さだった。  
中: 501iシリーズ(1999年)。はじめてiモードに対応した機種で、eメールが使えるようになった。携帯電話が情報端末化するターニングポイントになった機種といえる。重さは115gと現在と変わらないものの、液晶はまだ白黒。  
右: 最新の携帯電話704iシリーズ(2007年)。大きさはiモード登場時と変わらないが、電子マネー機能やカメラ・テレビ電話など、様々な機能が追加されている。

②実際にショルダーホンを使っている様子: 使用している人物との対比で、その大きさがよくわかる。  
担当編集者も、実際に持ってみた(右)。想像以上に重く、気軽に持ち歩くにはほど遠く感じた。